

2007 年度

<p>科目名</p> <p style="text-align: center;"><b>基礎薬理学</b></p>	<p>対象学科・学年</p> <p style="text-align: center;">薬学部薬学 2 回生</p>	<p>担当者</p> <p style="text-align: center;">小山 豊</p>
<p>授業テーマ</p> <p style="text-align: center;">医薬品の作用機構および体内での運命</p>		
<p>授業の概要と目標</p> <p>医薬品がどのような機構でその薬効を示すのかを学ぶ“薬理学”は、薬剤師となるために、必ず身に付けなければならない分野です。「基礎薬理学」では、作用部位に達した薬物の量と作用により薬効が決まることを理解するために、医薬品の体内における動きと作用に関する基本的な知識の習得を目指します。</p> <p style="text-align: center;">(日本薬学会モデルコアカリキュラム C13(1)「薬の作用と生体内運命」に対応)</p>		
<p>評価方法</p> <p>授業への出席数、および期末時に課す試験の成績を評価の対象とします。また随時小テストを行い、各受講生の目標への到達度をフィードバックして行く予定です。</p>		
<p>テキスト</p> <p style="text-align: center;">薬理学 - 医薬品の作用 -</p>	<p>著者</p> <p style="text-align: center;">竹内 幸一 福井 裕行 栗原 順一 編</p>	<p>出版社</p> <p style="text-align: center;">廣川書店</p>
<p>参考書</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・カラー図解 これならわかる薬理学</li> <li>・New 薬理学</li> </ul>	<p>著者</p> <p style="text-align: center;">H. Lullmann 他 田中千賀子、加藤隆一</p>	<p>出版社</p> <p style="text-align: center;">メディカルサイエンス・インターナショナル社 南江堂</p>
<p>授業スケジュール・内容</p> <p>以下に挙げる薬理学の基本項目に関する知識を、修得することを目標とする。</p> <p style="text-align: center;"><i>Key Words</i></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 序論 -薬理学とは?- : 薬力学、薬物動態学</li> <li>2. 薬物の用量と作用の関係 : 主作用・副作用、用量-反応曲線、ED<sub>50</sub> 値、LD<sub>50</sub> 値、EC<sub>50</sub> 値</li> <li>3. アゴニストとアンタゴニスト : 受容体作動薬・拮抗薬、競合的阻害</li> <li>4. 薬物の作用する仕組み : 受容体、Ca チャネル、Na チャネル、イオン輸送体、酵素</li> <li>5. 薬物受容体と生理反応の関連 : アドレナリン受容体、アセチルコリン受容体、ヒスタミン受容体</li> <li>6. 薬物の作用と細胞内情報伝達の関連 : G タンパク、cAMP、Ca<sup>2+</sup>、IP<sub>3</sub></li> <li>7. 薬効に個人差が生じる要因とは : 薬物動態、遺伝薬理学、加齢・発達、性差</li> <li>8. まとめ その1 「作用点に到達した薬物は、どのようなプロセスを経て薬効を表すのか？」</li> <li>9. 薬物依存性について : 耐性、退薬症候、脳内報酬系、麻薬、覚せい剤、向精神薬</li> <li>10. 薬物の主作用と副作用、毒性との関連 : 薬物の安全性、副作用と有害事象</li> <li>11. 薬物の投与経路とその意義 : 経口投与、経皮投与、直腸投与、注射投与、生物学的利用能</li> <li>12. 薬物の生体内分布における循環系の重要性 : 血管障壁、肝動脈・門脈系、血液脳関門、リンパ系移行</li> <li>13. 生体内薬物の排泄経路 : 糸球体ろ過、尿管再吸収、胆汁排泄、唾液中排泄、呼気中排泄</li> <li>14. 薬物の体内動態と薬効発現の関わり : 膜輸送、タンパク結合、初回通過効果、腎排泄、腸肝循環</li> <li>15. まとめ その2 「生体内へ入った薬物はどのような経路で、作用点に到達するのか？」</li> </ol>		